

シンポジウムⅡ 働き方改革に向けた協調・協働の取り組み

10月7日(金) 10:00～12:00 第1会場(旭川市民文化会館 1F 大ホール)

S2-5 働き方改革に向けたタスクシフティング ～臨床工学士によるカメラ保持業務～

沖縄赤十字病院 呼吸器外科¹⁾、沖縄赤十字病院 臨床工学課²⁾、沖縄赤十字病院 消化器外科³⁾

みやぎ 宮城 淳¹⁾、上間 勇輝²⁾、佐野 詩乃²⁾、友寄 隆仁²⁾、大嶺 靖³⁾

【はじめに】2018年10月に四病院団体協議会より『医師の働き方改革』について要望書が提出された。(1) 応召義務の見直し、(2) タスクシフティング、(3) 労働基準法に基づく当直の見直し、(4) 医師の自己研鑽を抑制しない、(5) 時間外労働時間の見直しという内容であった。その後2024年に向けて具体的な取り組みが進み看護師、助産師、薬剤師に続いて2021年10月に診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学士、救急救命士も法令改正を行ってタスクシフトが推進されてきた。当院では臨床工学技士(Clinical Engineer、以下CEと略す)によるタスクシフトとして内視鏡手術時のスコピスト業務を行っている。その現状について検討したので報告する。

【対象と方法】2018年5月より2022年5月までの4年間でCEのスコピスト業務を後ろ向きに検討した。

【結果】対象症例は890例、うち食道・胃など上部手術54例、結腸・直腸など下部手術159例、呼吸器214例、ヘルニア95例、肝胆膵429例、虫垂炎56例、婦人科29例、その他34例であった。スコピスト業務を行った時間は30分から16時間30分で合計3385時間、平均3時間48分であった。890例中、助手を必要とせず術者とCEの二人で手術を行った症例は302例(34.8%)であった。同期間内にカメラ保持業務に関連する合併症や偶発症はなかった。

【考察】肺癌、食道癌など高難易度手術は医師の助手業務が必要だが胆石、ヘルニア、虫垂炎など全体の34.8%では医師一人で手術を行っていた。また研修医はカメラ操作ではなく虫垂炎執刀含めた内視鏡手術が行えるため将来の外科医増加にも貢献できると考えられる。

【結語】本検討期間において3385時間(年間846時間)の負担軽減となった。CEのスコピスト業務は医師の働き方改革に貢献している。